

Niigata Award News

(食の新潟国際賞財団通信)

2016/12/12

第25号(表彰式典特集号)



Niigata Award

全日程

11月9日(水)

記者会見・表彰式・受賞者記念講演(朱鷺メッセ)

受賞者祝賀会・交流レセプション(ホテル日航新潟)

11月10日(木)

受賞者市内視察(エクスカーション)

第4回食の新潟国際賞表彰式典開催



平成28年11月9日(水)、第4回食の新潟国際賞表彰式典および関連記念事業が開催されました。

日本で唯一食の分野における国際賞の表彰式は、各界から数多くの御来賓のご出席のもと、国際色豊かに 厳粛かつ賑やかに開催されました。

その式典をはじめ記念事業の模様をお伝えいたします。

正賞モニュメントを手にする受賞者4名

(左より: 宇賀優作氏、増本隆夫氏、岩永勝氏、マーシー・ニコル・ワイルダー氏)



表彰式風景

第4回食の新潟国際賞表彰式



表彰式は約260名の各界の御来賓や財団関係者の見守る中、厳かに開会され、唐木英明選考委員長((公財)食の安全・安心財団理事長)の選考報告に続いて、池田弘財団理事長から各受賞者に対し、表彰状ならびに正賞モニュメントの他、副賞で本賞には1,000万円、佐野藤三郎特別賞には200万円、21世紀希望賞には100万円の目録の贈呈が行われました。続いて受賞者4名による喜びの受賞スピーチが行われました。

表彰式では御来賓の農林水産省農林水産技術会議事務局研究総務官 井上龍子様、国際連合食糧農業機関(FAO)駐日連絡事務所副所長 渡辺和眞様、独立行政法人国際協力機構(JICA)農村開発部部長 三次啓都様からそれぞれご祝辞をいただき、在日米国大使館農務担当公使ゲーリ・マイヤー様よりメッセージをいただきました。

また、国連世界食糧計画(WFP)日本事務所代表 スティーブン・アンダーソン 様、駐新潟大韓民国総領事館 総領事 趙建熙 様、中華人民共和国駐新潟総領事館 領事 岳 倩 様(総領事何平様代理)もご臨席されました。

そして表彰式の最後に、当財団を代表して当財団副理事長の亀田製菓(株)代表取締役会長CEO 田中通泰から感謝の言葉で幕を閉じました。



井上 龍子 様



渡辺 和眞 様



篠田 昭 様



三次 啓都 様



正賞として授与されたトロフィーは、新潟県佐渡市出身の世界的な金属工芸作家であり、前東京藝術大学学長・現文化庁長官の宮田亮平先生によって制作された「シュプリンゲン」です。

テーマは「跳躍。そして希望」。

未来に向かって2頭のイルカが力強く宙を舞います。



唐木 英明
選考委員長



田中 通泰
副理事長

受賞者記念講演

食の新潟国際賞【本賞】

岩永 勝 氏

国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター（JIRCAS）理事長

国際トウモロコシ・コムギ改良センター（CIMMYT）元所長

米国の農学者ノーマン・ボーローグ博士は、日本のコムギ品種「農林10号」をもとに、倒伏しづらく多収量のコムギを開発しました。後に「緑の革命」と呼ばれることになった、この驚異的な食糧の増産は、多くの人々を飢餓から救いました。博士は後にノーベル平和賞を受賞します。

「緑の革命」によって、世界の食糧問題は解決したかに思われましたが、2050年には90億人以上に増加する世界人口に対応するため、今後35年間で食糧を60%増収させなくてはなりません。そのためには、地域の特異性や多様性を生かし、持続的に発展できる農業改革が必要です。

「緑の革命」と対比させ、私はいろいろな「色」がグラデーションで共存できる「虹色革命」と名付けて推進してきました。

私が「国際トウモロコシ・コムギ改良センター」（メキシコ）の所長であったとき、干ばつに強くて栽培もしやすく、栄養価の高いトウモロコシの開発と普及の大型プロジェクトをスタートさせました。15年までにアフリカ13カ国で栽培が進み、栽培面積は250万ヘクタールを超えています。

現在、国立研究開発法人「国際農林水産業研究センター」では、西アフリカ起源のササゲ（大角豆）の新品種開発と普及に力を入れています。多くの伝統的な品種を交配して作った新しいササゲは生産性が約3倍に拡大。栄養価も高く、おいしいので高価格で売れ、農家の収益も約2倍に増えています。

今回の受賞を励みにして、世界の食糧問題解決のため、一歩でも前進できるよう努力を続けたいと思います。

（※当日講演内容を抜粋）



受賞者記念講演

食の新潟国際賞【佐野藤三郎特別賞】

増本 隆夫 氏

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構(NARO) 農村工学研究部門 地域資源工学研究領域 領域長

私は、持続的な水田農業を追求しています。日本のような湿潤地帯ばかりでなく、世界では乾燥・半乾燥地帯など、さまざまな気候の下で稲作が行われています。持続的な稲作のためには、資源としての水管理、水循環の把握が重要。このため、農業水利用を考慮した分布型水循環のモデル化に取り組んできました。

これまでの研究活動で評価された点は、大きく二つあると思います。まずは地域への貢献。亀田郷や白根郷など、低平地帯の排水問題に対応するため、雨量計や排水施設の配置、施設の規模を決める手法を開発。また、排水管理研究の一環として開発した水位予測システムは、亀田郷土地改良区で利用されました。

次に国際展開。開発した排水モデルや水管理モデルをモンスーンアジア水田地帯も研究対象として、農業という人為的な水管理が特徴的な広域水循環に展開しモデル化を図りました。受賞を機に、今後は畑作農業を中心とした地域にも広げ、将来にわたる安定した農業用水の確保に貢献したいと思います。

(※当日講演内容を抜粋)



受賞者記念講演

食の新潟国際賞【佐野藤三郎特別賞】

マーシー・ニコル・ワイルダー 氏(米国)

国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター(JIRCAS) 水産領域 主任研究員

近年、エビ養殖業は急速に発展し、2兆円規模の産業になっています。一大生産地であるアジアの発展途上地域では、事業の拡大に伴い海洋汚染が進行。またエビの病気を防ぐため、不適切な大量の薬物投与が行われています。

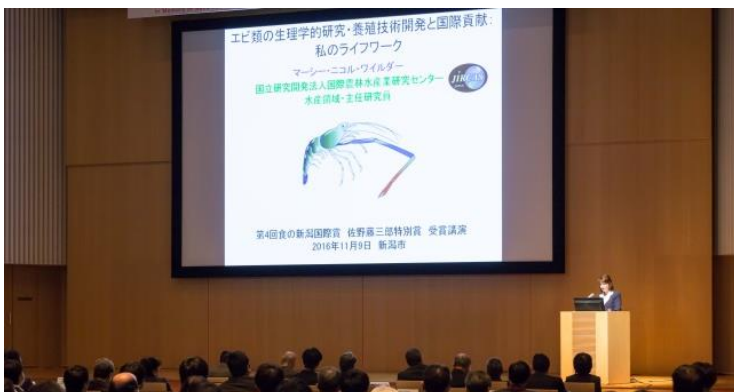
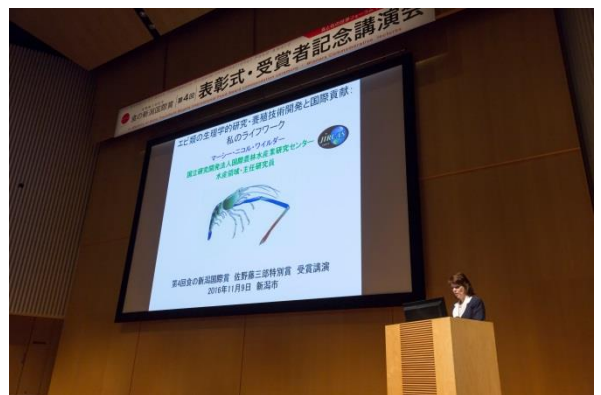
持続的なエビの養殖技術を開発しようと、ベトナムのカントー大学と共同でオニテナガエビの養殖に取り組むとともに種苗生産技術を開発。稚エビの安定的供給を可能にしました。

2007年9月から妙高市で、世界初の屋内型エビ生産システムを設置しました。育成プール内で水を垂直に動かし、平面的にしか飼育できなかったエビを立体的に飼育できるようになり、安全でおいしいバナメイエビの商業的生産が始まりました。現在も「妙高ゆきエビ」として広く販売されています。

この養殖技術は15年8月にモンゴルに導入され、ラオスでも検討されています。

今後も安全安心で環境に優しいエビの生産方法を提供したいと思います。

(※当日講演内容を抜粋)



受賞者記念講演

食の新潟国際賞【21世紀希望賞】

宇賀 優作 氏

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構(NARO) 次世代作物開発研究センター 基盤研究領域 育種素材開発ユニット 上級研究員

イネは人類にとって重要な作物の一つ。将来の人口増加に伴う食糧不足を回避するうえで、干ばつ地域でのコメ増産は重要な課題です。

一般に、水稲は根が浅く干ばつに弱いですが、陸稲は水稲に比べて、根が土中深く伸びるので干ばつに強いです。ただし、陸稲は収量が低く、味もよくない。そこで水稲と陸稲の「いいとこ取り」で干ばつに強いイネ作りに着手しました。

6年間かけて根を深くする遺伝子「*DRO1*」を発見し、水稲に導入しました。その水稲は2倍以上根が伸び、1カ月以上水をやらない乾燥ストレスにも耐え、収量も高いという成果を得ました。

たった一つの遺伝子を変えることで、作物の干ばつ耐性をこれほど飛躍的に高めた例は初めて。「地下革命」として世界的に注目されました。

これからも、もっと干ばつに強いイネを作り、この成果を世界中に届けたい。その一念で研究を進めていきます。

(※当日講演内容を抜粋)



受賞祝賀会・交流レセプション



表彰式、記念講演会に続いて行われた 受賞祝賀会・交流レセプションには、国内外からの参加者も含め多くの皆様の出席により開催されました。

受賞者を囲んで和やかな雰囲気の中で交流が行われ、篠田新潟市長の乾杯の御発声で祝賀会が開宴されました。

祝賀会では以下の御来賓の方々からご祝辞をいただきました。

- ・ 国際連合世界食糧計画(WFP) 日本事務所 代表 スティーブン・アンダーソン 様
- ・ 新潟県 副知事 寺田 吉道 様

閉会のご挨拶を兼ねて、当財団副理事長の株式会社ブルボン社長 吉田康が、財団および賛助会を代表し感謝のスピーチを述べ、めでたくお開きとなりました。

また表彰式に対し各界の多数の方からご祝電を頂戴致しました。心より御礼申し上げます。



スティーブン・アンダーソン 様



寺田 吉道 様



吉田 康 副理事長



新潟市長 表敬訪問



11月9日午前、受賞者4名は池田理事長同行のもと、篠田昭市長を表敬訪問しました。

表敬訪問は、新潟市役所の市長特別応接室で終始和やかな雰囲気の中で行われました。

篠田市長からは各受賞者へのお祝いの言葉と、国際賞の創設意義 また 食の新潟の歴史や背景などの紹介がありました。

受賞者からは、それぞれの喜びと、これまでの活動の取り組みが語られ、今後国際賞の受賞を契機に さらに活動を続けるとともに「食の新潟国際賞」の存在を世界に発信したいという挨拶がありました。

記者会見

11月9日、表彰式前に朱鷺メッセで行われた記者会見には、多くのマスコミの皆様にお集まりいただき、国内外に国際賞の発信がされました。



米国カルフォルニア「農業6次産業化視察団」を派遣

新潟市の農業特区での様々な取り組みが進む中、国際的視点から新潟市の農業と食品産業のありかたについて考え、今後の6次産業化を推進するために農業と食品産業が融合し6次産業化の先進地である米国カルフォルニアに視察団を派遣しました。

特に視察団には市内大学等で農業や食品加工を学び、将来新潟での農業や食品分野に就業したいという意欲ある学生も同行させ、将来を背負う若者の国際的視野を広げる一助にするため当財団では派遣費用を支援しました。

視察団(団長 門脇基二 新潟大学副学長、副団長 石黒 正路 新潟薬科大学副学長)は総勢17名(うち学生8名)で平成28年9月4日～9日の6日間、米国カルフォルニア州を訪問しました。

特に、全米農業部門トップの名門校 カルフォルニア大学 デービス校を訪問し大学関係者との交流や持続可能農業研究所などの視察を通じ、大学と農業生産者・企業と緊密に連携した教育内容や人材育成や研究や実験を企業の活動に直結して活かして行くシステム、など大変に参考になりました。

訪問中、地元大型スーパーや食品店などを訪問し農産品や加工食品の市場調査や特に現地で盛んなオーガニックとして付加価値を高めている生鮮品や加工品が多く販売されていることも確認できました。

また、世界的食品企業であるデルモンテの本社や研究開発室での商品開発やトマト農場でのダイナミックな収穫現場の視察なども体験することができました。

次にカルフォルニアワインの中心地、ナパバレーワイン醸造所群落などを視察ブドウ栽培とワイン醸造関連視察を通じての6次産業化の取り組みなども研修しました。

参加者からはアメリカの農業のダイナミックさはもとより産学連携による農業や企業が目指すより高い付加価値作りに6次産業化へのヒントを得たようです。

帰国後10月25日に視察報告会が開催され視察団に参加した学生が3チームに分かれ、視察報告とともに学生が考える新潟の農業お6次産業化の可能性について提言がありました。

財団主催で初めての事業でありましたが、素晴らしい企画と御協力いただいた新潟薬科大学の西田浩志教授には感謝申し上げます。

何よりも、参加した学生の出発前と帰国後の彼らの変化は今後の新潟の農業と食品産業の担い手としての活躍を予感させるものであり、財団として今後も若い人の **人財育成事業**を継続開催も検討してまいります。

※詳細は次号にて詳しくご紹介します。

デルモンテ トマト農場



ナパバレー



カリフォルニア大学
UCデービス校



UC DAVIS
UNIVERSITY OF CALIFORNIA, DAVIS

「食の新潟国際賞財団」訪中視察団の派遣

当財団主催による訪中視察団(団長 中山 輝也財団理事、新潟県国際交流協会理事長、団員総勢14名)が平成28年9月25日～30日の6日間中国黒龍江省を訪問しました。中国訪問視察団は日中国交回復40周年の平成24年9月の訪中団に続き4年ぶり2回目の派遣となります。

この訪問は食の新潟国際賞の冠でもある佐野藤三郎氏の三江平原での国際協力のその足跡を辿り、その偉業を確認し伝えてゆくという目的で黒龍江省外事弁公室の受け入れ・協力により実現しました。

新潟にとって日中友好協力事業のシンボルでもある三江平原地域や龍頭橋ダムの視察ととともに農業関係機関や企業、大学なども訪問し交流を行いました。

また、現地の佳木斯大学の外国語学院のご厚意で、念願の佐野氏が関わった三江平原開発プロジェクトの誕生や経緯を現地中国の人たちにも伝える、佐野藤三郎氏の紹介展示コーナーと食の新潟国際賞や新潟県産品や観光PRを行う「新潟館」が開設され、そのオープンにも団員全員が立ち会い視察することができました。

今後この新潟館を通じて佐野氏の認知度を高めるとともに新潟と現地との交流の懸け橋とするため展示の充実とともに継続的な展示活動を行いたいと考えております。

訪問団はこの他、三江平原農業地帯の灌漑状況、実験農場、大慶油田地帯、黒龍江省水利科学院、「北大荒現代農業農園」等を視察し関係者との交流をしました。

訪問時期の三江平原はちょうどトウモロコシと米の収穫時期を迎え、中国南方地域からの小型トラクター(久保田名)を積んだ500台を超えと思われるほどのトラック群団とも遭遇し、延々と続くトウモロコシ畑、稲穂風景を見ながら2000キロに近いバスの旅となりました。

2017年末にはハルビンから三江平原の中心都市、佳木斯市まで新幹線が開通し2時間弱での短時間でつながるとの話で三江平原も今後はもっと近くなりそうです。

※詳細は次号にて詳しくご紹介します。

龍頭橋ダム前



佳木斯大学 新潟館



公益財団法人 食の新潟国際賞財団 賛助会員(平成28年度)

● 特別会員

亀田製菓(株)
(学)新潟総合学園
佐藤食品工業(株)
新潟県農業協同組合中央会
(株)栗山米菓
(株)新宣
亀田商工会議所
(株)電通東日本新潟支社
NST新潟総合テレビ
三菱商事(株)新潟支店

(株)ブルボン
一正蒲鉾(株)
(株)第四銀行
亀田郷土地改良区
(株)新潟日報社
(株)エイケイ
(株)新潟クボタ
にいがた22の会
(株)日本食糧新聞社
ホテル日航新潟

● 正会員

新潟市農業協同組合
新潟県信用組合
(株)第一印刷所
(株)本間組
石本酒造(株)
(株)ミカサ
神山物産(株)
丸七商事(株)
ハセガワ化成工業(株)
大東産業(株)
藤屋段ボール(株)
(株)タケショー
(株)新潟博報堂
BSN新潟放送
新潟陸運(株)
(株)新潟食品運輸
山崎醸造(株)
月島食品工業(株)
(株)フジテレビジョン
日本製粉(株)関東支店
日本甜菜製糖(株)
(株)鳥梅

(株)山由製作所
新潟工科大学産学交流会
(株)キタック
北越工業(株)
丸榮製粉(株)
新潟万代島総合企画(株)
鍋林(株)ヘルスフーズ事業部
(株)鈴木コーヒー
TeNYテレビ新潟放送網
(株)栗田工務店
三和薬品(株)
松田産業(株)
セツカートン(株)新潟工場
(株)藤井商店
日本精機(株)
東邦産業(株)
麒麟山酒造(株)
(株)加島屋
(株)日本フードリンク
(株)アド・メディック
UX新潟テレビ21

● 個人会員

藤島 安之
大越 斎
和田 充彦
河内 直史
古泉 肇
五十嵐 豊

佐藤銀治郎
宇野 勝雄
新保 房機
栗田 浩
長谷川宏志
尾山 宏輔

久保田紳一
和澄 孝男
塚本 太一
牧 利幸
井田 増夫
高橋 常孝

(順不同)

食の新潟応援団(賛助会)募集中!

食を通じて飢餓や貧困などに苦しむ世界の現状に目を向けると、日本にいる私たちにも食の危機が及びつつあり、世界の人の命が一つにつながっていることがわかります。

食と私たちの命を守る本財団の事業に賛同し応援してくださる皆様を募集しています。

詳しくはホームページをご覧ください。ホームページ <http://www.niigata-award.jp/jp/join/>